

VI 新生児外科的疾患に関する総合的研究

— 昭和 59 年度総括 —

分担研究者

秋 山 洋 (鹿児島大学医学部附属病院小児外科)

研究協力者(順不同)

平 井 慶 徳 (順天堂大学医学部小児外科)
中 條 俊 夫 (国立小児病院外科)
水 田 祥 代 (福岡市立こども病院外科)
岡 田 正 (大阪大学医学部小児外科)
遠 藤 昌 夫 (慶応義塾大学医学部外科)
岩 淵 真 (新潟大学医学部小児外科)
河 野 澄 男 (静岡県立こども病院新生児未熟児外科)
西 寿 治 (神奈川県立こども医療センター一般外科)
高 橋 英 世 (千葉大学医学部小児外科)
伊 藤 喬 広 (名古屋大学医学部第 1 外科)
石 田 治 雄 (東京都立清瀬小児病院外科)
三 川 宏 (国立小児病院麻酔科)
長 屋 昌 宏 (愛知県心身障害者コロニー小児外科)
田 宮 恵 子 (北海道立小児総合保健センター麻酔科)
鈴 木 玄 一 (東京都立清瀬小児病院麻酔科)
今 井 康 晴 (東京女子医科大学心研外科)
常 本 実 (国立小児病院心臓血管外科)
内 藤 泰 顕 (国立循環器センター心臓外科)
矢 野 博 道 (久留米大学医学部小児外科)
上 田 嘉 昭 (東京大学医学部小児外科)

新生児外科は小児外科分野の中心的存在であり、小児外科全手術総数のおよそ10%程度存在し、年間約2,300例の手術数があり、出生数が減少しているにもかかわらず、なお漸増の傾向を示している。一方において、新生児外科はここ数十年來急速に進歩し、その手術成績も向上し、多くの外科的疾患をもった患児が救命され、正常児と同様の生活が送れるようになっている。しかしながら、一部の疾患においては、いまだ予後が悪く、たとえ救命されたとしても、長期に障害を残して生存していく可能性をもったものもある。今回、この分担研究を担当するにあたり、このような観点から、生命に関する上からも問題があり、しかも長期予後が明確でなく、障害を残す可能性のある事項をとり上げ、将来の改善を目的とし、新生児外科疾患をとり扱う頻度の高い施設より20名の研究協力者に協力をしてもらうことにした。

テーマは長期経静脈、経腸栄養を行わなければならない患児、新生児期にショック症状を示す疾患に対する予後改善、最も手術成績が悪く患児の長期予後上問題点の多い極小未熟児の手術に関する諸問題、生命の予後の最も悪い心大血管疾患、各種新生児疾患における長期予後等の、現在でも解決されていないものを取り上げた。

本年度は、各研究協力者の報告にみられるように、これらのテーマからみでの治療現況、各分野における治療面での具体的改善を目標としての研究結果が報告されている。長期予後として今回は、極小未熟児の治療および数少ない分野での予後調査が行なわれ、その成績は極めて悪いものであったことを報告した。この研究が引きつづき行なわれ、今回あげた新生児外科疾患のなかで、問題点の多い各テーマについての長期予後調査を行なうとともに、長期に障害を残さないように、新生児期からの治療の問題点を解決されていくことが望まれる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



新生児外科は小児外科分野の中心的存在であり、小児外科全手術総数のおよそ 10%程度存在し、年間約 2,300 例の手術数があり、出生数が減少しているにもかかわらず、なお漸増の傾向を示している。一方において、新生児外科はここ数十年来急速に進歩し、その手術成績も向上し、多くの外科的疾患をもった患児が救命され、正常児と同様の生活が送れるようになってきている。しかしながら、一部の疾患においては、いまだ予後が悪く、たとえ救命されたとしても、長期に障害を残して生存していく可能性をもったものもある。今回、この分担研究を担当するにあたり、このような観点から、生命に関する上からも問題があり、しかも長期予後が明確でなく、障害を残す可能性のある事項をとり上げ、将来の改善を目的とし、新生児外科疾患をとり扱う頻度の高い施設より 20 名の研究協力者に協力をしてもらうことにした。

テーマは長期経静脈、経腸栄養を行なわなければならない患児、新生児期にショック症状を示す疾患に対する予後改善、最も手術成績が悪く患児の長期予後上問題点の多い極小未熟児の手術に関する諸問題、生命の予後の最も悪い心大血管疾患、各種新生児疾患における長期予後等の、現在でも解決されていないものを取り上げた。

本年度は、各研究協力者の報告にみられるように、これらのテーマからみでの治療現況、各分野における治療面での具体的改善を目標としての研究結果が報告されている。長期予後として今回は、極小未熟児の治療および数少ない分野での予後調査が行なわれ、その成績は極めて悪いものであったことを報告した。この研究が引きつづき行なわれ、今回あげた新生児外科疾患のなかで、問題点の多い各テーマについての長期予後調査を行なうとともに、長期に障害を残さないように、新生児期からの治療の問題点を解決されていくことが望まれる。